

南山城の古代寺院

上原 真人

1. 古代寺院とは何か

はじめに 同志社大学の辰巳和弘先生から、京田辺市郷土史会で南山城の古代寺院について講演するように仰せつかりました。南山城がどの範囲を指すのか、人によって多少、異なるようです。ここでは古代の行政区分で言う相楽郡、綴喜郡、久世郡の範囲。地形で言うと(かつては巨椋池があったので、必ずしも正確ではありませんが)宇治川・淀川より南、現在の行政区分で言うと、京田辺市、八幡市、久御山町、城陽市、宇治市の一部(宇治川より南)、宇治田原町、和束町、井手町、山城町、精華町、木津町、加茂町、笠置町、南山城村の範囲を南山城と認識して話しを進めます。ここ京田辺市には、三山木廃寺、普賢寺、興戸廃寺の3つの古代寺院跡が存在します。

古代寺院の役割 寺院と言うと、檀家があって墓地がある姿を思い浮かべます。これは江戸時代の檀家制度で確立した姿です。古代寺院の境内に墓地はありません。古代以来の法灯を守る法隆寺や薬師寺では、現在でも境内に墓地はありません。寺に墓地が付属するに至った理由は、本日の主題とはずれるので省略しますが、少なくとも、死者の供養をしたり、菩提を弔うことが、古代寺院の主要な役割ではありませんでした。それでは、古代寺院には、どのような役割があったのでしょうか？

寺院とは、願いをかなえるため仏に祈る場所、つまり法会の場所でした。その祈願内容は、死者の供養を含めて各種さまざまでした。豊作を祈り、病気の平癒を祈り、外敵の退散を祈り、平和を祈り、家族や一族の繁栄を祈り、社会の安寧秩序を祈り、等々です。その願いをかなえるため、古代寺院で法会を執行する僧達・尼達は、それぞれ共同生活をして、法力を身につけることをめざし、修行・勉強に励みました。したがって、古代寺院には、僧尼が生活し、勉強に励み、仏を祀り、法会を執行するための各種施設がありました。

現代でも町中を歩いていると、寺はすぐに区別できます。一般住宅との際だった違いは、門構えや、本堂の外観に表われています。外観の違いは、古代寺院においては、もっと顕著でした。古代寺院を一般住宅と区別したのは、礎石立ち瓦葺という建築構造です。この建築構造は仏教寺院造営技術として、588年、朝鮮半島の百済から伝わりました。奈良県

明日香村にある飛鳥寺の造営です。それ以前の日本の建築は、地面に掘り込んだ穴に柱を立てる掘立柱、屋根は茅、藁、檜皮などの植物で覆った草葺建物でした。礎石・瓦葺建物と掘立柱・草葺建物の違いは、外観だけの違いではなく、建築技術そのものの違いです。

穴を掘って埋めれば、柱は1本でも立っていますが、礎石の上に柱を立てれば、1本だけではコケてしまいます。したがって、礎石建物では、柱同士を横につないで、柱が倒れないようにする必要があります。つまり、部材を入念に組みあげねばなりません。柱同士をつないでも、礎石上に載っているだけなので、大風で吹き飛ばかかもしれません。そこで建物の重量を増すために、屋根に瓦を葺きました。重い屋根を支えるには、太い柱が必要です。瓦や太い材で建物の重量が増すと、ゆるい地盤では建物が沈んでしまいます。だから、基礎工事をきちんとせねばなりません。地盤がゆるければ、地面を掘り下げて、下から改めて土を入れて突き固めていく。これが掘り込み地業です。

つまり、礎石・瓦葺建物は、基礎工事・木組などの基本的な建築技術において、掘立柱・草葺建物とまったく異質でした。縄文時代の三内丸山遺跡や、弥生時代の池上曾根遺跡で太い柱が使われていたと大騒ぎしました。しかし、太い木と、それを切り出す道具と、運搬する労働力があれば、太い柱はどこでも立てられます。寺院建築技術の到来こそが、日本建築史上最大の技術的画期であったことは否定できません。

南山城の古代寺院を考える材料 以下、この日本建築史上最大の画期となった古代寺院の歴史的変遷を、南山城の場合について具体的に考えていきます。といっても、南山城には、法隆寺のような古代建築をそのまま残す寺院はありません。また、大阪の四天王寺や奈良の薬師寺のように、七堂伽藍を古代のままに復興した寺院もありません。

しかし、古代の仏堂跡や塔跡が発掘で明らかになれば、それをもとに古代寺院の実態を解き明かすことは可能です。南山城において、本尊を祀る金堂、釈迦の骨＝舍利を祀る塔、坊さん達がパワーを身につけるために勉強する講堂など、中枢部の全貌がほぼ明らかになった古代寺院として、山城町の高麗寺跡、城陽市の平川廃寺や久世廃寺があります。

このほか八幡市の西山廃寺(足立寺)や志水廃寺、精華町の里廃寺、井手町の井手寺、山城町の蟹満寺などで、金堂などの建物やその一部が検出されています。とくに蟹満寺では、現存の白鳳時代の如来仏を中心に金堂跡が検出され、御本尊が創建当初から同じ場所で祀られていることがわかりました。

残念ながら、京田辺市には発掘で全貌が明らかになった古代寺院跡はありません。唯一、普賢寺で塔心礎が現存し、大御堂観音寺の御本尊である十一面観音とともに、かつての栄華を偲ばせてくれます。しかし、創建当初の普賢寺の姿はわかりません。皆様方のおもな関心は、京田辺市の古代寺院にあると推察します。京田辺市の古代寺院を検討する直接の

材料は少ないのですが、これら寺院跡では瓦が採集されています。一つの仏堂には何千枚もの瓦が使用されます。木造建築は柱や壁などの本体は消滅しても、瓦は必ず残ります。古代寺院の年代や系統を考える上で、瓦が重視される理由です。

京田辺市にある普賢寺や三山木廃寺では、かなりの量の瓦が採集され、公表されています。ただし、興戸廃寺はやや材料不足の感があります。考古学の発掘調査では、出土した瓦は、ともなう遺構と一緒に出土した遺物とともに記録、分析することで、各種の歴史像を組み立てていきます。採集資料では、その作業が不可能なため、歴史情報として価値が低いのですが、それしか材料がない場合は、やむを得ず採集資料だけで議論することもあります。ただし、採集資料には不確実な点が多いので、今日は、同じ南山城地域に所在し、発掘で実態が判明している古代寺院、すなわち高麗寺跡の資料を援用します。

つまり、隣の山城町で発掘された高麗寺出土瓦を分析して、南山城という地域のなかで高麗寺がどのような変遷をたどったのか検討し、その成果から京田辺市の古代寺院のなかでも、採集資料が比較的豊富な普賢寺と三山木廃寺の成立と推移について類推するわけです。その類推の成果が正しいか否かは、将来、正式の発掘調査で明らかになるでしょう。ただし、採集資料が豊富なのは、遺跡が荒らされている可能性も示唆します。

十数年前、寺院跡を盗掘したり、発掘現場から出土品をかすめ取り、瓦などを収集していた奈良在住の人物が捕まり、その盗品の検討のため、奈良県警に出頭したことがあります。盗品リストには、普賢寺の瓦がかなり含まれていました。盗掘されると、その部分に埋まっていた歴史情報は永遠に失われることになります。心ない盗掘を防ぐには、常日頃から地元の間人が、遺跡に関心を持ち、管理し、監視することが必要です。郷土史会の方々も、そうした監視を怠らぬよう、よろしく御願いたします。

2. 高麗寺の変遷(付図左)

高麗寺の創建 礎石、瓦葺で代表される新来の建築技術は、日本最初の本格寺院である飛鳥寺が造営された588年からそれほど時を経ずに、南山城の地にも現れました。南山城最古の古代寺院、それが山城町にある高麗寺です。高麗寺跡からは、創建飛鳥寺の軒先を飾った軒丸瓦と同じ木型(範)で型抜きした瓦(R1)が出土します。これを同範瓦と呼んで、それを葺いた建物がほぼ同時代に建った証拠とします。木型がどれだけ長持ちするのか断言できませんが、少なくとも木型の耐用年数の範囲内で、同時代だという意味です。ただし、木型は使用するうちにすり減っていきます。その減り具合で、木型の耐用年数の範囲内における時期差を認定することも可能です。高麗寺の飛鳥寺同範瓦が、飛鳥寺創建より新しいことは言うまでもありません。

百済から来た瓦工が作った瓦だけあって、飛鳥寺創建軒丸瓦は百済の瓦とそっくりです。百済起源の瓦の系譜を引くという意味で、これを百済系軒丸瓦と呼びます。高麗寺跡で出土した百済系軒丸瓦には、創建飛鳥寺瓦と同範品以外に、平城京内にある姫寺や海竜王寺の軒丸瓦とよく似たもの(R2)がありますが、実物を並べて比較したところ、同じ木型の製品ではないとのことでした。

この百済系軒丸瓦が出土したことから、高麗寺の創建は6世紀末～7世紀前半、いわゆる飛鳥時代＝推古朝までさかのぼる可能性が生じてきました。しかし、高麗寺跡の発掘調査で出土した百済系軒丸瓦は10点強にすぎず、金堂跡や塔跡などの伽藍中枢部で出土した瓦の圧倒的多数は、R3～R6の川原寺系軒丸瓦(初現は660年代、7世紀後半の天智・天武朝の瓦)とそれに組合う無紋軒平瓦(R7)と重弧紋軒平瓦(R8～R10)でした。

古代寺院跡の発掘調査で、建物跡の周囲から大量の瓦が出土した場合、その建物跡の創建年代は、絶対多数を占める瓦で決めます。つまり、最も大量に瓦を必要とするのは、その建物が建ったときですから、使った最も量の多い瓦で、その建物の創建年代を決めるというわけです。それでは出土量の少ない瓦は何か？ 通常、それは、建物を修理したときの補足瓦と理解します。瓦は風で飛んだり、地震で落ちたり、冬に凍結して割れたりします。その際に、必要に応じて瓦を補足する。それが補足瓦です。しかし、高麗寺の百済系軒丸瓦は、絶対多数を占める川原寺式軒丸瓦よりも古いわけですから、補足瓦ではありません。とすれば、何か？ 正解はわかりませんが、私は、高麗寺には前身となる百済系軒丸瓦を葺いた仏堂があったと理解しています。

昭和13年、京都大学の梅原末治先生が高麗寺跡を発掘した時、塔跡の基壇外装(＝基壇化粧)は外側が瓦積み、内側が石積みの二重になっている事実から、外側を7世紀後半、内側を6世紀末～7世紀前半の基壇化粧と解釈しました。しかし、昭和59～63年の5ヶ年にわたり、山城町教育委員会が発掘した時には、塔の基壇化粧が二重になっている事実は再確認できたのですが、基壇を頑丈にするため二重構造にした可能性も提起され、内側基壇が百済系軒丸瓦の時代の前身建物であるとの確証は得られませんでした。

遺構が確認できなくても、7世紀後半～8世紀前半に伽藍が整備された古代寺院跡から、7世紀前半にさかのぼる瓦がごく少量出土する例は少なくありません。飛鳥地域なら定林寺・坂田寺・檜隈寺、斑鳩地域なら法起寺・法輪寺・額田寺、南山城ならば城陽市の久世廃寺・正道廃寺、精華町の里廃寺などがその例です。京田辺市の三山木廃寺や普賢寺も、そのなかに入るかもしれません。

『日本書紀』によれば、推古天皇32(624)年9月3日、寺と坊さんの数を調べたら、46ヶ寺、僧816人、尼569人を数えたといっています。この記事は古代寺院を論じる際によく引用

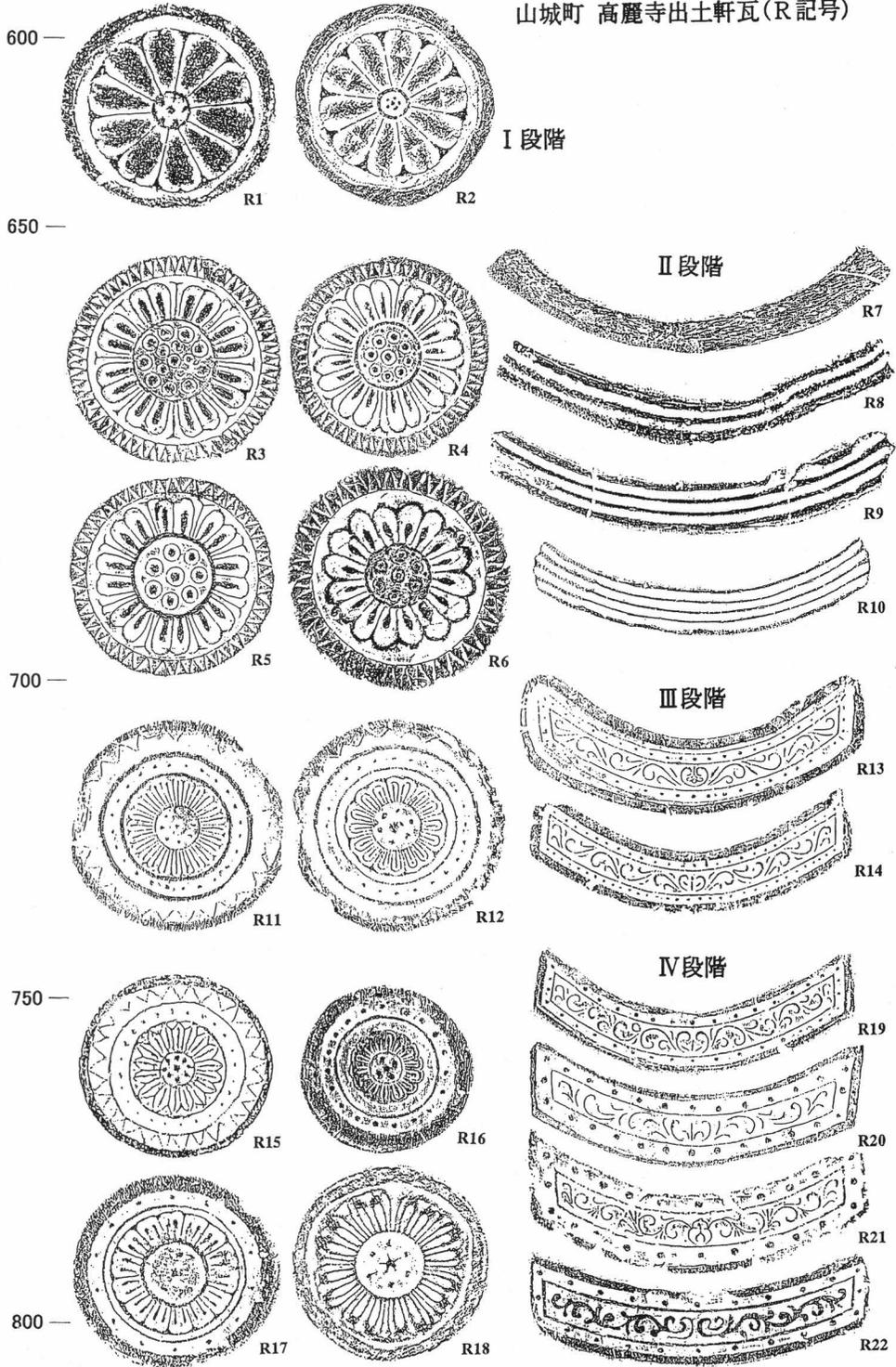
され、事実か否か、事実とすれば、推古末年に存在した46ヶ寺とはどれか議論されてきました。しかし、この記事は、推古朝の仏教政策全体の中で位置づける必要があります。推古天皇2(594)年2月、皇太子と大臣とに「三宝興隆」の詔が出ます。皇太子とは聖徳太子、大臣とは蘇我馬子のことです。この詔の後には「是時、諸臣連等、各為君親之恩、競造仏舎。即是謂寺焉」と記載があり、三宝興隆が、諸臣連すなわち有力豪族による寺の造営という形で具体化したことがわかります。しかし、そこで寺と呼んでいたものは、金堂・塔・講堂をはじめとする各種の仏教施設からなる七堂伽藍ではなく、仏舎すなわち仏像を祀った一堂からなるものが一般的だったのです。

この三宝興隆の詔から30年を経た時点で、その詔の成果を確認するために行った仏教界の国勢調査結果が、46ヶ寺1385人の僧尼だったわけです。当然のことですが、ここでカウントされた寺の中には、一つの仏堂からなる小規模なものが数多く含まれていたはずですが、しかも、それは君親之恩の為に建てた仏堂ですから、プライベートな性格が強かったと考えられます。いわゆる氏寺です。当然、そのなかには邸宅の一角に設けた持仏堂も含まれていたと思います。その場合、のちに七堂伽藍が整備されたとしても、もとの仏堂の場所を踏襲するとは限りませんし、もとの仏堂の瓦を転用しても、その量は限られたものになるでしょう。百済系軒丸瓦から推測できる高麗寺の前身仏堂についても、おおよそのイメージをつかんで頂けたでしょうか？

高麗寺の整備 一方、7世紀後半(660年代以降)に行われた高麗寺の伽藍整備は、出土した川原寺式軒丸瓦の在り方から、かなり鮮明にわかります。高麗寺を中心とした南山城地域では、川原寺式軒丸瓦はR3→R4→R5→R6の順で出現しました。これを私は高麗寺系列の川原寺式軒丸瓦と呼んでいます。どれも同じに見えるかもしれませんが、元になるR3は飛鳥の川原寺と同範です。ハスの花を意匠化した蓮華紋は、中央に花が散った後にできるハスの実(蓮子)を配した中房を置き、周囲に2枚1単位の花びらを放射状に配しています。最も退化した高麗寺系列川原寺式軒丸瓦R6は、本来は2枚の花びらが単位だったことを忘れ、中心に置いた中房も小さく、蓮子数も少なくなっています。R6は高麗寺では数少ないのですが、同じ山城町蟹満寺金堂の創建瓦です。また、R5は精華町里廃寺で主体を占める瓦に似ています。

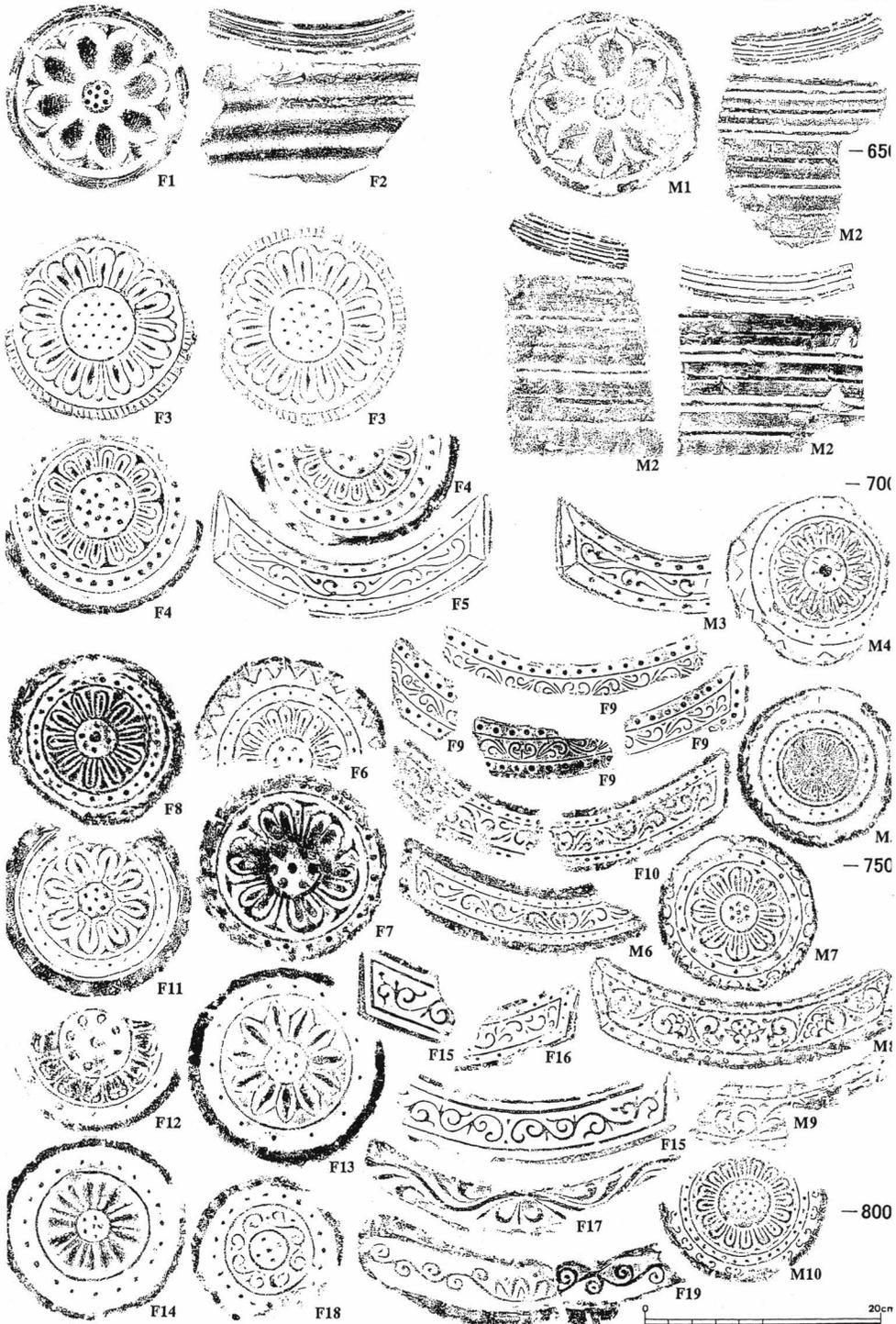
高麗寺跡の伽藍中枢部におけるR3の出土量に注目すると、金堂跡でR3の比率が最も高く、門や塔跡がこれに続き、講堂跡が最も少ないことがわかります。これはそのまま中枢伽藍の造営順序を反映しています。つまり、高麗寺の伽藍整備は金堂、門や塔、講堂の順で進展したのです。文献史料や発掘調査において、古代寺院の造営が、まず金堂から着手された事実が多く確認されています。高麗寺の造営もまさにセオリーどおりです。

山城町 高麗寺出土軒瓦(R記号)



京田辺市 普賢寺出土軒瓦(F記号)

京田辺市 三山木麿寺出土軒瓦(M記号)



付図 高麗寺・普賢寺・三山木麿寺の瓦 (縮尺6分の1)

蟹満寺以外にも、精華町の里廃寺や下狛廃寺、城陽市の正道遺跡、あるいは滋賀県竜王町の雪野寺でも高麗寺系列川原寺式軒丸瓦が出土しています。しかし、同じ川原寺式でも、城陽市久世廃寺や宇治市広野廃寺、あるいは京田辺市の普賢寺のもの(F3)は、高麗寺系列とは違った系譜に属します。この違いは、多分、工房(技術者集団)系譜の違いです。

7世紀後半～8世紀前半は、7世紀中葉までに成立した氏寺が全面的に整備されたり、新たに氏寺が造営された時代です。先ほど、推古朝末期に実施した仏教の国勢調査では、46ヶ寺を数えたと申しましたが、『扶桑略記』という書物には、持統天皇6(692)年には日本全国で548ヶ寺があったと記録されています。100年に満たない間に、寺の数は10倍以上、分布も南北両端を除く列島全域にふくれあがったのです。天武天皇14(685)年には、諸国の家ごとに仏舎を作るように命じており、548ヶ寺という数字はその成果でした。

天武天皇の時代には、大化改新を契機に成立した地方行政組織＝評(郡の前身)が本格的に機能し始めました。評の長官には、その土地の有力豪族(7世紀以前には古墳を作っていた連中の子孫)が任命されました。彼らは評の役所(のちの郡衙)の近くに競って大きな寺院を造営しました。古代寺院の呼称には、法隆寺、法興寺など仏教に関わる法号と、斑鳩寺、飛鳥寺などの地名を冠した呼称が並存します。地方寺院に多い評(郡)名を冠した郡名寺院は、評の長官になるような有力氏族の氏寺であったことを示しています。

この時に奨励されたのが「仏舎」の造営ならば、推古朝の三宝興隆政策の段階と大差ないようにも見えます。しかし、高麗寺や平川廃寺、久世廃寺などの遺構のあり方からすれば、少なくとも南山城では、仏堂一つでも寺と呼んだ時代は終わり、寺とは金堂・塔など複数の堂塔から成るといった認識が一般化していました。そして、寺の整備や造営を推進する技術者集団も、地域ごとに活動しています。ただし、その活動範囲は国や郡(評)などの行政区分とは関係なく広範に及び、しかも、同時代の同地域にも、異なる系統の複数の技術者集団が活躍していました。

高麗寺の補修 先ほど説明したように、出土量が少なく、紋様や製作技術から創建瓦よりも新しいと判断できる瓦は、補足瓦です。たかが補修用の瓦なら、その寺院にとってさほど重要な意味はないのでは?と思われる方が多いと思います。しかし、補足瓦は、その寺院の維持管理が、どのような体制のもとでなされたかを考える重要資料です。つまり、補足瓦からも、各時代の仏教政策や仏教観を読みとることができるのです。

付図のR11～R14は、加茂町にある恭仁宮造営時に新調した瓦と同じ瓦です。御承知のように、恭仁宮は天平12(740)年、大宰府で起こった藤原広嗣の乱を契機に、平城宮にいた聖武天皇が、三重県、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府(伊賀・伊勢・尾張・美濃、近江、山城)を歴訪し、南山城にいたって、突如、遷都を宣言した都です。恭仁宮の造営工

事は、平城宮にあった大極殿(=天皇が官人の前に姿を現す公式の建物)と、そのまわりを囲む回廊を解体し、恭仁宮の地に運ぶことから始まりました。現在、平城宮跡で大極殿の再現工事が進んでいますが、あれが恭仁宮に運んだ大極殿そのものを想定しています。

しかし、近江の紫香楽宮の造営を理由に、恭仁宮はわずか3年で工事中止となり、天平17年には都が平城宮に戻ります。そして、天平18年には恭仁宮大極殿は山背国分寺に施入され、以後、恭仁宮中枢部は山城国分寺となります。宮殿を寺院に改造するには、塔などの建物を新たに造営せねばなりません。したがって、恭仁宮跡から出土した瓦には、①平城宮大極殿の解体、移築に伴って平城宮から運び込んだ瓦、②恭仁宮造営に際して新調した瓦、③山城国分寺に施入された後の堂塔整備のために新調した瓦、④以後の山城国分寺の維持管理に使用した補足瓦、の4種類が含まれています。

出土状況を分析して、この4種の瓦群を確定すると、高麗寺のR11～R14が恭仁宮②の瓦群と同範もしくは同紋です。これと同範の軒瓦は平城宮でも出土しています。平城宮や恭仁宮の造営は、造営省という臨時の役所(令外官)が担当しており、これらの瓦を作った工房も造営省が管轄していました。範も当然その役所の所有物でした。

その中央の造営官司が保有する範で作られた瓦が、本来、氏寺として造営された私的な寺院に何故供給されたのでしょうか？ これは恭仁宮遷都によって、恭仁宮の近くにある寺院に特別優遇措置が執られた結果と、私は解釈しています。平城京内には元興寺、薬師寺、興福寺、大安寺などの大寺院以外にも数多くの氏寺があり、平城京周辺にあった東大寺や法隆寺などの諸寺とともに、重要な仏教行事、法会に参加しました。つまり、都近辺の寺院には、都を荘厳し、守護し、祈願をかなえるための法会を行うという重要な役割が与えられました。中央政府は、そのための資金援助や技術援助を惜しみませんでした。平城京内外の寺院から、平城宮と同じ瓦が出土するのはその現れです。

恭仁宮造営計画が進むと、平城京内やその周辺の寺々ではなく、南山城にあった寺院にその役割が期待されることになります。高麗寺が整備された7世紀後半から、すでに半世紀以上が経過し、恭仁宮造営時にはかなり老朽化していたはずですが、恭仁宮と同範の瓦が高麗寺から出土するのは、そういう理由があります。同様の現象は、久世郡の平川廃寺でも確認できるので、恭仁宮遷都にともない、南山城のかなり広範囲の寺院に優遇策がとられたと解釈できます。しかし、恭仁宮から平城宮に都が戻った後は、高麗寺から出土する瓦は宮都との関係が稀薄になります。平城宮との強い関係は認められないのです。

高麗寺のR15は恭仁宮③群の瓦、すなわち山城国分寺造営時の新調瓦と同範です。また、R19は長岡宮の時代(784-794年)に、当初は長岡宮に、のちにはもっぱら寺院に供給された軒平瓦です。R15・R19は同範例が出土する遺跡が知られており、その性格から、これ

がまとまって出土すると、瓦供給の背景に山城国衛などの地方の役所が介在したと想定できます。しかし、高麗寺跡では、R15・R19は各々1つしか出土していません。高麗寺の歴史の中で、R15・R19は重要な意味を持たなかったのです。

これに対し、R16～R18とR22は、高麗寺跡で一定量が出土しており、8世紀末～9世紀初における体系的な修理工事に用いた補足瓦と判断できます。また、R21は寺域内では1点しか出土していませんが、高麗寺に付属する瓦窯跡＝高井手瓦窯で焼成したことが確認され、同時期の補足瓦とわかりました。このR21は奈良市の西隆寺(近鉄大和西大寺駅近くにあった奈良時代後期の寺。西大寺＝僧寺に対する尼寺として称徳天皇が造営)創建瓦と同範ですが、R16～R18・R22はすべて高麗寺独自の紋様の瓦です。しかも、R16・R18とR21は高麗寺の西北方にある高井手瓦窯で、R17は寺域東に隣接する高麗寺瓦窯で生産したことが確認されています。

大規模な古代寺院の造営は、造寺司と呼ばれる臨時組織が担当しました。その組織には瓦工房が付属しています。東大寺の造営官司は造東大寺司であり、その瓦工房は造東大寺司造瓦所です。しかし、造寺司は寺が竣工すると役目を終えて解散し、その後の施設の維持管理に必要な瓦は、寺院組織内にある修理所と呼ぶ部署が製作したり、必要に応じて外注することになります。寺院に隣接して設けた瓦窯は、創建期ならば造寺司管轄の瓦窯、修理時ならば修理所管轄の瓦窯の可能性が高いことになります。R21の瓦は、西隆寺で出土するものと比べて範が痛んでおり、本来、西隆寺を造営する役所＝造西隆寺司保有の範が、その解散に伴って高麗寺の修理所に払い下げられたか、あるいは解散にともない範を持った瓦工が高麗寺修理所に所属したと推測できます。高麗寺では1点しか出土していませんが、R20は唐招提寺金堂創建瓦と同範で、これも平城京内の寺院造営組織が解散して製品が払い下げられたり、工人が流れてきた例になると私は考えています。なお、唐招提寺金堂創建瓦は、亀岡にある丹波国分寺でまとまって出土しており、国分寺の造営や修理にも、解散した平城京における造寺司の工房や工人が関与したことがわかります。

高井手瓦窯の報告書は、同瓦窯で焼成した瓦を、延暦10(791)年4月18日に山背国部内諸寺の浮図(仏塔)が年を経て破損が甚だしいので、使いを遣わして修理させたという『続日本紀』の記事に結びつけています。年代的には、ほぼこの時期に相当し、高麗寺の報告書を見ると、たしかにR16～R18やR22は塔跡に集中します。しかし、塔は他の建物に比べて使用する軒瓦の絶対量が多く、出土比率も高くなります。その目で見ると、これらの瓦は塔だけでなく、金堂や回廊などの高麗寺の中心伽藍でまんべんなく出土しています。また、山背国部内の諸寺に使いをやって修理させたのですから、山城国内に同じ紋様の瓦を使った寺院があってよいはずですが見あたりません。さらに、山背国部内と指定してい

る以上、実際の工事を担当したのは、山城国分寺の維持管理にも関与した山城国衙である可能性が高く、恭仁宮の発掘で判明した③④群に属する山城国分寺の瓦などに、その候補を探る必要があります。R15やR19がそれに該当します。しかし、R15やR19が、高麗寺では少ししか出土しないことは先述したとおりです。なお、付図には掲載していませんが、高麗寺からは播磨国衙管轄下の瓦工房で製作した「播磨国府系軒瓦」が出土しています。この意義は、私にはよくわかりません。

以上の観点からすると、高麗寺の主要な補足瓦R16～R18やR21・R22は、高麗寺独自の修理所が、塔だけでなく高麗寺全体の修理をめざして独自の活動を行った結果と考えたほうがよいと思います。以上、高麗寺は小さな仏堂として成立したR1・R2の瓦が示すⅠ段階、七堂伽藍が整備されたR3～R10の瓦が示すⅡ段階、恭仁宮遷都にともない優遇措置を得たR11～R14の瓦が示すⅢ段階、独自の修理、維持管理活動を行ったR15～R22の瓦が示すⅣ段階という、4段階の変遷をたどったこととなります。これをもとに、次節では、京田辺市の古代寺院の変遷について検討を加えます。

3. 出土瓦から見た普賢寺と三山木麿寺の変遷(付図右)

京田辺市の古代寺院は、高麗寺と似て非なる変遷をたどりました。ここでは、瓦の採集資料が比較的豊富な普賢寺と三山木麿寺を取り上げて、高麗寺との類似点や相違点を指摘し、歴史的意味の違いを考えます。ただし、以下の話は、あくまでも公表された採集資料から推測できる範囲のもので、発掘を行うと評価が大きく変わる可能性もあります。

普賢寺・三山木麿寺の創建と整備 京田辺市の三山木麿寺や普賢寺でも、一見古そうな軒丸瓦が採集されています。F1とM1がそれに該当し、両者は同範のようです。滋賀県立大学教授の高橋美久二さんは、これを川原寺式軒丸瓦に先行する山田寺式軒丸瓦(初現は640年前後)の系譜をひく紋様と解釈しています。その解釈の当否は別にして、組合う軒平瓦(F2やM2)から見て、7世紀後半のなかでも古い瓦と考えてよいと思います。

三山木麿寺や普賢寺で、この瓦を葺いた仏堂跡が発見されるかどうか。もしかすると高麗寺の百済系軒丸瓦と同様、後の伽藍整備に前身仏堂の所用瓦が再利用された可能性もあります。また、組合う軒平瓦M2は三山木麿寺のほうが数多く採集されているので、この段階で大規模工事を行ったのは、三山木麿寺の方かもしれません。高麗寺Ⅰ段階に相当しますが、その実年代は、高麗寺よりも半世紀以上遅れます。

次の高麗寺Ⅱ段階に相当するのが、普賢寺のF3～F5です。F3は、先述した川原寺式軒丸瓦ですが、高麗寺を拠点に変遷した高麗寺系列とは系統が異なります。時期的にも高麗寺より少し遅れると思います。F4は奈良県の大和郡山市で生産され、藤原宮に供給

された軒丸瓦(6281B型式)とよく似ていますが、珠紋帯の外側の鋸歯紋帯を欠く点が異なります。採集された量から考えると、軒平瓦F5が組合う可能性があります。とすれば、F4も藤原宮の時代(694-710年)よりも多少新しいと解したほうが良さそうです。F3～F5は比較的まとまった数が採集されているので、普賢寺は7世紀末～8世紀初に中心伽藍が整備されたと考えてよいと思います。

これに対して、三山木麿寺の高麗寺Ⅱ段階相当の瓦は不明確です。Ⅰ段階の工事が大規模だったので、必要なかったのかもしれませんが。普賢寺のF5と同範のM3がありますが、組合う軒丸瓦が見あたりません。発掘調査でその欠落が補填されるのか、本当に欠落しているのか確認されれば、三山木麿寺の新たな性格に言及できるかもしれません。

普賢寺・三山木麿寺の補修 高麗寺Ⅲ段階に相当する瓦は、普賢寺のF6・F10、三山木麿寺のM4～M6です。高麗寺や城陽市の平川麿寺ほど顕著ではありませんが、恭仁宮遷都にともなう優遇措置が、南山城で広く実施された可能性を示唆します。とくに高麗寺Ⅱ段階の瓦が認められない三山木麿寺では、M4・M5に近い瓦が比較的多く採集されているので、創建に続く大規模修理は、恭仁宮造営を好機として実施されたのかもしれません。なお、F7～F9も8世紀前半にさかのぼる可能性が高い普賢寺独自の瓦です。おそらく、恭仁宮造営前後にも、普賢寺独自の造瓦組織が稼働していたのでしょう。

とくに注目しておきたいのはF9です。F9は恭仁宮造営前後に恭仁宮や平城宮管轄下の官営工房で生産したR14やF10・M6(平城宮の瓦型式番号で言うと6721型式)と、紋様構成がよく似ています。つまり、三子葉をおいたC字上向形を中心飾として、蕨手三葉を左右に五転させています。ところが、紋様の構成要素や製作技術において、F9は6721型式よりも明らかに古式です。すなわち、上外区と脇区の珠紋帯を斜め方向の凸線で区画し、瓦当の断面形が段顎で、平瓦部を桶巻き作りで作っているのです。宮都所用軒平瓦の断面形は、段顎から曲線顎へと変遷し、藤原宮はすべて段顎、長岡宮・平安宮はすべて曲線顎で、平城宮で両者が共存します。恭仁宮造営時の②群軒平瓦はすべて曲線顎ですから、段顎から曲線顎への変遷は740年以前に完了していたことになります。平城宮の6721型式軒平瓦は、すべて曲線顎です。つまり、F9は平城宮6721型式軒平瓦よりも古い技術や紋様要素を備えているのです。

事実は明快でも、解釈は流動的です。私は宮都の造営に、近畿各地から技術者が動員されており、彼らが在地の造営事業にも携わり、必要に応じて宮都に出向した以上、宮都以外で創作された技術やデザインが、宮都の瓦に影響することもあったと考えています。つまり、平城宮で出土しないF9が、平城宮6721型式のもとになったと考えます。南山城には、これ以外にも平城宮管轄下の工房に先んじて、新技術・新デザインの発信源となった

瓦がいくつか存在すると推測しています。しかし、奈良時代には平城宮こそが、唯一の新技術情報・新デザイン情報の発信源だと強弁する立場に立てば、F 9 は古い技術や紋様要素を残した工房が、平城宮6721型式の影響で生み出した瓦という解釈も可能です。

一方、高麗寺IV段階相当の普賢寺瓦F 11～F 17のうち、F 13・F 14とF 15は恭仁宮④群、すなわち山城国分寺の補足瓦と同範で、F 16は高麗寺のR 19と同範です。普賢寺の維持管理に、高麗寺以上に山城国衙が強く関わったことを示しています。また、F 11は南山城においては普賢寺しか出土していませんが、星野猷二さんが京都府の北端、丹後国分寺で同範品が出土している事実を指摘しました。この同範関係の理由はよく判りません。いずれにしても、F 11・F 13・F 14・F 15は比較的まとまった数が採集されており、8世紀後半に山城国衙が普賢寺の維持管理に積極的に関与したと理解できます。これに対し、三山木廃寺では山城国衙の関与を示す高麗寺IV段階相当の瓦は採集されていません。それとは逆に、8世紀後半と思われるM 7・M 8・M 10は、三山木廃寺独自の華麗な紋様の瓦で、新羅的な様相が伺えます。

なお、M 10と同範の軒丸瓦は、奈良市の横井廃寺で採集されています。また、量は多くありませんが、F 12は唐招提寺、M 9は東大寺と同じ瓦です。高麗寺IV段階のR 20やR 21と同様、平城京とその周辺における寺院造営に関与した工房や工人の流れととらえてよいと考えます。9世紀以降、普賢寺にはF 17～F 19のような、南山城に他に例のない瓦が使われています。蓮弁ではなく唐草を配したF 18のような軒丸瓦は、近江に類例があります。F 19は平安時代中頃の瓦と思われますし、これ以外に12世紀以降の瓦も普賢寺で採集されています。普賢寺が現在の御堂観音寺へとつながることは、採集された瓦からも推定できるわけです。

普賢寺・三山木廃寺の性格 以上、材料不足の感は否めませんが、普賢寺と三山木廃寺は、同じ瓦で創建されたにもかかわらず、その後の歴史的展開にかなり差があったことが瓦から推測できます。とくに、高麗寺Ⅱ段階に相当する7世紀後半～8世紀初の伽藍整備が、三山木廃寺でははっきり確認できないこと、普賢寺では8世紀後半に山城国衙が伽藍の維持管理に積極的に関与しているのに、三山木廃寺にはそれが認められず、独自の造瓦活動を行なっていること、などは際だった違いと申せましょう。

つまり、規模や管理主体の点で、普賢寺は三山木廃寺よりも公的性格が強いと言えます。先述したように、氏寺建立者の中には、評(郡)の長官になるような有力者がおり、その寺院は郡名で呼ばれました。『興福寺官務牒疏』によると、現在の御堂観音寺の前身である普賢寺は「筒城寺」と呼ばれたとのこと。採集された瓦から見るかぎり、三山木廃寺よりも公的性格が強い普賢寺は、まさに綴喜郡司の氏寺にふさわしいものと言えましょ

う。これに対して、三山木廃寺は佐牙神社の神宮寺であるという説が『京都府の地名』に紹介されています。この説の当否を、採集された瓦から決めるのは困難ですが、一般に神宮寺が展開するのは8世紀以降のことと考えられます。創建が7世紀後半にさかのぼる三山木廃寺を神宮寺と断じるのは勇気がいりますが、恭仁宮造営前後に神宮寺に変身したと強弁されると、反対する理由は見当たりません。

まとめ 今日、発掘されてその内容がわかる南山城の代表的古代寺院として高麗寺を取り上げ、出土瓦からその歴史の変遷を四段階に分け、それと対比することで、京田辺市の古代寺院である普賢寺と三山木廃寺の歴史の変遷を検討しました。同じ頃に創建された古代寺院でも、その後の維持管理の在り方を採集された瓦から推測すると、歴史的性格の違いが見えてくることにお分かりいただけたでしょうか？ 発掘資料では量的に明確な議論ができるのに、採集資料ではなかなか議論しにくいことも、あわせてお分かりいただけたと思います。それでは長時間、御静聴ありがとうございました。

本稿は、2004年5月23日、京田辺市社会福祉会館で開催された京田辺市郷土史会の総会における講演「南山城の古代寺院」のために準備した原稿と配布資料をもとに、その後の見解を補足して作成した。

(うへはら・まひと = 当センター理事、京都大学大学院文学研究科教授)

参考文献

- 石田茂作 1936年『飛鳥時代寺院址の研究』
上原真人 1984年『恭仁宮跡発掘調査報告(瓦編)』京都府教育委員会
上原真人 2001年「額田寺出土瓦の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集、
[共同研究]古代荘園絵図と在地社会についての史的研究
京都府立山城郷土資料館1983年『山城の古瓦』第1回特別展図録
柴田実・高取正男監修 1981年『京都府の地名』日本歴史地名大系26、平凡社
中島正ほか 1989年『史跡 高麗寺跡』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第7集、山城
町教育委員会
中島正 1990年「山背における播磨国府系瓦出土の背景－高麗寺出土8・9世紀代古
瓦の検討から－」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集
刊行会
中島正・島軒満ほか 2000年『高井手瓦窯跡』
奈良国立文化財研究所 1996年『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
西川英弘・鷹野一太郎 1982年『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書第3集、田
辺町教育委員会
星野猷二 2000年『塩澤家蔵瓦図録』伏見城研究会